

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	短歌班報
Author(s)	石丸, 公
Citation	龍南, 254: 100-102
Issue date	1944-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8587">http://hdl.handle.net/2298/8587</a>
Right	

生活ニ大ナル光ヲ與ヘマシタ。自分等ハ歸校後必ズコノヤウニ頑張り先頭ニ立ツテ校風ヲ刷新シマス。最後ニ國軍通信ノ飛躍的向上ヲ祈念スルト共ニ校長殿始メ諸教官殿ノ御健康ヲ祈リ致シマス。ココニ謹ンデ申告致シマス。」

眼の玉一つ動かさず申告する日直生徒に校長殿はまた瞬き一つせず眞剣に申告をうけられた。別れに望んでの訓示

「期間は短かゝつたが皆大いに取切つてくれ本當に教育者と被教育者の熱と熱がぶつかりあつた意義深い期間であつた。皆學校を出たら營門をくぐる人ばかりである。或はもつと逼迫したら學帽のまゝ出られることがあるかも知れない。科學戰に、特に電波戰に於て諸子に對する期待また大なるものがある。歸校後も自軍大いに頑張つてもらひたい。」

少通校々歌を唱ひつゝ校門を出づ。振りかへれば校門は來た時とかはらず新しく「また來てくれ。」と叫んでゐる。少通校の萬歳を三唱して別れた。何か泣き出したいやうな衝動を覺える。

電車の停留場迄教官殿、助教殿は送つてきて下さつた。本當に十日間起居を共にして陰に陽にお世話になつた教官殿との別れはつらい。途中堂々たる行進。「武夫原」を軍歌として歌ひながら電車の驛迄來た。これも我等が嚆矢であらう。

電車線路は相當長く一直線である。一番後に乗つて互に見えなくなるまで手を振りあつてゐた。懐しき少通校去らばよ。

十五年創立以來、十六年には部長稻葉先生を聖戰場にお送りして、其の後殆んど生徒の意氣により運営し熱により發展して來た

通信部は今回諸先生の御理解と、軍當局の非常なる御援助により無事少通宿泊訓練といふ學徒としても始めてのことをさせていただくことが出來、更に邊しく育つて行く。

三月二日宮城前で軍人勅諭全文を奉唱したのであるが其時のあの感激といふか日本人に生れた喜にふるへた胸の鼓動は永久に忘れることが出來ない。あゝ御民われ生けるしるしあり。我等學徒生ける驗あり。

最後に本訓練に援助をよせられた當局始學校の諸教官殿、諸先生方に深く感謝しつゝ筆を擱く。——三、一〇——

## 短歌班報

文二甲二 石 丸 公

去年の六月、短歌班を創設して以來はや一年に近い月日は流れた。その間上田教授を班長に、松本教授を指導教授にいただき我我十數名の班員は、遅々たる歩みながらも精進を重ねてきた。學校の行事その他の都合により週二回の研修も満足に行ふことは出來なかつたが、抒情精神をいくらかなりとも得たとは言へると思ふ。

短歌は日本民族とともに成長し發展してきた日本特有の抒情詩であつてその本源は生物通有の表出活動にあるのである。表出活動——それは生命に直接であり、本源的である。この表出活動そのものは實に生命の重要な一面であつて、生命に附屬してゐる

とか、生命のために存するとかいふ第二義的なものではなく、この生命そのものである表出活動こそは生活中最も重んぜられねばならぬものである。抒情詩は生命にもつとも直接な本源的なものであり、即ち生命そのものであるが、實に短歌は日本民族の表出活動に最も適した抒情詩なのである。

かくて短歌は日本民族の抒情精神を基調とし過去に於いて偉大なる足跡を占め、或ひは物語の母胎となり、或ひは連歌の母胎となり、何回かそれ自身を崩壊させては新しい藝文ジャンルを生みつつ、一方では依然としてその固有の形態を維持して今日に至つたが、現在では日本文學の一分野として短歌は存し、文學の主潮流でもなく、主役でもない。極めて特殊な一分野を許されてゐるにすぎない観がある。然しさればと言つて我々は現代日本文學に於ける短歌の位置について不平を言ふのではない。苛烈なる戦局の展開しつつある今日、我々はたゞ短歌の道を極めることを願ふのみである。然らば短歌の道とは何であらうか。

茂吉は赤光に於て

くわん草は丈ややのびて濕りある土に戦げりこのいのちはやと詠じ、また最近に於て

大きな時にあたりて生けるわれ力きはめむとす一日たりともと歌つた。前者は萱草の萌芽のそよぎに、直ちに生命の愛情詠歎を喚起されて詠じたものでありいはゞ個人的な感情であるが、後者には時代の切實な痛感があり、廣く國民としての生活態度を歌つたものであり、いはゞ民族的な感情がこもつてゐる、かく茂吉に於ては二つの傾向が兩立混淆してゐるがいがづれが彼の本質と見

らるべきであらうか。茂吉のみならず、すべての歌人にもこの傾向は見られるのである。勿論作家の個性によつてAの傾向が強く現はれる人と、Bの傾向が強く現はれる人とがあるが、しかし多くは環境や時代の情勢によつて同一の作家でも、或る時はAを現はし、又他の時はBを現はすのが普通である。かやうに相異なる二つの傾向が同一作者に兩立し、しかもそれが多く對象によつて規定されるものであるとすれば、我々は民族的な感情と個人的感情との根底に横はるより根源的な感情の存在を認めなければならぬ。この感情的存在を我々は詩的興奮とも、詩的感動とも、抒情精神とも呼び得るであらう。我々がAといひBといつて、對立する二つの異なる感情のやうに考へたものは、實は等しくこの根源的な抒情精神の異なる方向への發現に外ならないのであつて、本質に於ては何等變りはないのである。たゞさやうな詩的興奮を誘發した對象が、民族的である場合と、個人的である場合とによつてその詩的感動の表現に多少異なる相貌が呈せられたに過ぎない。かやうにして茂吉に於て見られたAもBも、實は抒情精神のあらはれ方の二つの變貌にすぎないのである。

短歌は最も直接にその抒情精神に關聯する。短歌は一見した所では、當面の民族的行動に縁遠いやうに見えるが、實は決してさうではない。短歌こそは民族の内面的構造の前提をなす所の抒情精神を直接的に表現し、更に新しい抒情の誕生をうながすものであり、従つて民族的行動の精神的側面の本質に參與するものである。日本民族は、今や有史以來最大の民族的行動として、新しい世界と神話を創造しやうとしてゐる。この新しい神話は、逞しい

民族の意志と美しい抒情とによつて綴られなければならない。而して短歌はその抒情精神——人間の魂の全面をゆり動かす大きな感動なくしては出来ないものである。歴史を回顧せよ、あの民族的抒情にみちた萬葉時代は國運隆々として發展の一路を辿つてゐたではないか。又一躍世界に我が國の存在を明らかにし、その檣舞臺にのり出した明治時代に於ては抒情精神は發刺として開花したのである。かくの如く、抒情精神は國家の運命をはかるパロメーターである。今や、日本は、米英撃滅、新しき道義的世界の創造へと邁進しつつあるのであるが、かかる時にこそ、抒情精神は烈火の如く國民のすべてに燃えあがらなければならない。前言した如く實に短歌はこの抒情精神に最も直接に關聯があり、日本民族の表出活動に最も適した詩形なのである。心ある龍南人諸兄よ、短歌によつて民族の抒情の洗練をうけ、その中で不斷に鍛へあげられた精神力を以て、進んで行かうではないか。

終りに班員の作品を掲載する。みんな拙いものであるが、諸兄の御鞭撻を乞ふ。

文二ノ二 石 九 公

目に見えて老いづき給ひし父母と枕を並めて今宵い寝むか

青若葉の照り流るるに戀ひゆきて光りのなかに、丘越えゆかむ

文二ノ三 下 田 道 生

風風げばオシロトシボの満ち充ちて初秋の日ざし和らげるかな

まつろはぬもの討ち伏せむ一億の民の息吹きを街にして感ず

文二ノ四 濱 田 義 道

夜に入りて未だも止まずなが雨のかそけき音をききて眠れり

並みよろふ外輪山に遠向ひしまらくものを言はざりにけり

文一ノ四 玉 利 勲

青葉風孤獨てふ語にこだはりし春のゆふべの愁ひさらになし  
あたたかき山の斜面にたどりつき中勘助の「銀の匙」よみぬ

文一ノ四 木 庭 立 夫

バラを描くあまり静けき花なれば眞紅を加へてむこの日バラを描く  
静けさがぐいぐい流轉してゆく蟬鳴いてゐるイタリヤ降服のラデオ

理二ノ一 劉 大 三 郎

いただきの豁間を白く残しつつ阿蘇めぐりこし雪雲はれぬ  
ともすればくづれむとする心堪へ歌集にうつろなる眼を落しをり

理二ノ五 中 村 傳

吹きなりし風の靜かにをさまりて森の月影畑に落ちたり

理一ノ三 森 野 一 孝

花一輪見つつを居れば臥せる身の憂さをも忘るそのかほる色  
校長の奉讀し給ふ大詔にたゞ默念と頭たれたり

## 厚生部報

### 第四回生徒生活調査報告

序

厚生部幹事